

2025年度 人間環境学部 自己推薦入学試験
2025年度 人間環境学部 国際バカロレア利用自己推薦入学試験

小論文 問題

【問題1】、【問題2】のうち、どちらかを選択して解答しなさい。

解答した問題は、解答用紙の問題選択欄に○で囲むこと。

【問題1】

以下は外来種問題に関する最近の記事である。これを読んで設問に答えなさい。

奄美・沖縄の世界自然遺産登録から26日で2年になる。鹿児島県奄美大島では、アマミノクロウサギなどの希少動物を捕食する野生化した猫（ノネコ）の対策が道半ばだ。島内5市町村でつくる「ねこ対策協議会」と環境省はノネコの捕獲・譲渡に2018年度から着手。これまで466匹を捕らえたものの、600～1200匹とされる推定生息数には程遠い。譲渡先の9割を島外に頼るいびつな構図も浮かぶ。

16日、横浜市にあるビルの一室。猫の飼い主を募る猫カフェ「ケット・シー」に数組の親子連れがいた。飼育する17匹のうち7匹は、奄美大島で捕獲されたノネコ。「たつご」「うけん」と島ゆかりの名前が付く。毛並みもきれいで野生だったとは見えない。

同店ボランティアの市川由佳さん（54）は「昔に比べ避妊去勢も済み、人慣れた猫が運ばれてくる割合が高い。人里で暮らしていた猫が多いのだろう」とみる。

■「生まれた島の土に帰るべき」

都内ではこの日、複数の団体による猫の譲渡会があった。犬猫の殺処分ゼロを目指すNPO法人「ゴールゼロ」（東京）の専門部会「あまみのねこひっこし応援団」が世話をしてきた奄美のノネコもいた。

同応援団は、ねこ対策協の取り組み開始当初から、譲渡の認定団体としてノネコを引き受けてきた。その数は総捕獲数の9割、420匹に上る。首都圏を中心に飼育するほか、猫カフェと協力して新たな譲渡先を探す。「ケット・シー」もその一つだ。

1匹約6000～7000円かかるノネコの輸送費などは寄付金で賄う。関係者は譲渡先を探す期間が1週間と短いため、収容期間の延長や財政的な支援の必要性を訴える。

ゴールゼロ代表で獣医師の齊藤朋子さん（49）は「奄美で生まれた猫だから島の土に帰るべきだ。地元で譲渡の機会を設けて」と強調。ノネコを巡る問題については、人間が猫を捨て外飼いを続けた結果とし、「世界遺産の恩恵は受け、ノネコは要らないというのは身勝手」と憤る。

■繁殖力「マングースより驚異」

なぜ奄美大島で譲渡数が少ないのか。ノネコの“予備軍”とされる野良猫も相当数いることが背景にある。対策協事務局の奄美市世界自然遺産課は「身近な野良猫を引き取る人はいるが、ノネコまで飼おうとする人は少ない」と説明する。輸送費支援や収容期間の延長には事業費増につながるなどと難色を示し、「手続きの簡素化などで譲渡先を広げたい」とした。

ノネコは繁殖力が非常に強く、「(ほぼ根絶された) 特定外来生物のマングースより脅威」との声もある【引用者注：環境省は2024年9月3日に奄美大島におけるマングースが根絶されたことを宣言した】。推計で150～200匹生息する徳之島では15年度から環境省と3町が捕獲・譲渡している。

2025 年度 人間環境学部 自己推薦入学試験
2025 年度 人間環境学部 国際バカロレア利用自己推薦入学試験

小論文 問題

(前ページ続き)

同省のノネコ捕獲検討会委員で、沖縄大の山田文雄客員教授（70）＝動物学＝は「猫を捕獲し、譲り渡さざるを得ない状況にしたのは島民なのに、島外の人が熱心に引き取る状況はいかなるものか。地元は責任を認識し、不幸な猫を増やさないとすべきだ」と指摘した。

◇ノネコの捕獲・譲渡

2018年7月に始まった。主に環境省は捕獲、奄美大島5市町の「ねこ対策協議会」が譲渡を受け持つ。協議会が運営する奄美ノネコセンター（奄美市）に捕獲したノネコを一時収容。ノミ取りや避妊去勢、ウイルス検査などを経て島内外16の個人・団体の譲渡認定者に情報提供し、引き取り先を1週間募集する。見つからなければ安楽死させるが、これまで回避している。

出典:奄美の捕獲ノネコ 9割は首都圏へ 島外頼りのいびつな構造 「世界遺産の恩恵は受け、ノネコ要らないは身勝手」2023/07/2507:57
南日本新聞 373news.com (<https://373news.com/news/storyid/179080/>)

***** :

問1 この記事では、「島民」と「島外の人」とが対照的な対応をしているように描かれている。この記事における「島民」と「島外の人」の対応について簡潔にまとめなさい。

問2 そもそも外来種の駆除はなぜ必要とされているのか。その理由として考えられるものを書きなさい。

問3 近年では、個々の動物の命や痛みは人間の命や痛みと同様に扱われるべきだとする「動物倫理」の考え方が広まっている。動物実験や工場畜産に対する批判が強まり、ベジタリアンやヴィーガンになる人も増えている。この立場は、下線部のように、ノネコを捕獲し安楽死させるという計画を批判している。マングースを根絶する過程では、3万匹以上が殺処分されたとされるが、これも動物倫理の観点からは批判の対象になる。このような、外来種対策と動物倫理の対立について、根拠にもとづいて論じなさい。

2025年度 人間環境学部 自己推薦入学試験
2025年度 人間環境学部 国際バカロレア利用自己推薦入学試験

小論文 問題

【問題2】

世界には戦乱や自然災害などさまざまな原因で生命の安全が脅かされる人々や、社会経済環境のために貧困に陥る人々がいる。以下の文章は今現在何らかの支援を必要としている人々について書かれた記事である。これらの文章を読んで設問に答えなさい。

【文章1】

『二重被災、集団移転望んでも 区長「みんなバラバラ」 能登地震10カ月』

元日の能登半島地震から1日で10カ月。再び冬が近づく奥能登の谷間の集落で、1人の区長が「振り出しに戻された」とこぼす。避難所を出て、穏やかな日々を取り戻そうとしていた矢先。9月の大雨で自宅が流され、ふるさとの未来が見えなくなった。

石川県輪島市中心部から南に6キロ。谷内（やち）均さん（66）が区長を務める同市打越町は、山林の谷筋に家々があった。

2歳～80代の12世帯約20人で新年を迎えた集落を地震と豪雨が襲い、今ここで暮らす人はいない。孫3人を含めた7人家族の谷内さんも家を失い、再び避難所に身を寄せ、片付けに通う。

大工の谷内さんが建てた自宅は地震には耐えたが、大雨の濁流で1階部分がなくなった。周囲に散乱する杉の流木には、見慣れた衣類や趣味の釣り具、ソファや布団が引っかかっている。

2階部分は10メートルほど押し流されて形だけとどめる。妻の智恵さん（64）が泥だらけのランドセルを手に「孫はまだ半年しか使っていないのに」と悲しげに言う。

谷内さんは泥だらけの仕事場で、ノコギリやカンナに触れる。修業時代から手入れをしてきた数々。浸水し、金属部分が腐食した。「片付けをしても苦しくて、半日しかここにはおれん」

元日の地震で集落では崖崩れが起き、亡くなった住民もいた。幹線道路につながる一本道は杉の倒木でふさがれ、チェーンソーで道を開いて5日に谷間を出た。歩けない高齢者は、脚立と板材で作った担架に乗せて運んだ。

4月下旬に電気が復旧したが、集落に戻ったのは谷内さん一家と70代の夫婦、60代の単身者の3世帯10人だけだった。

谷内さんは「倉庫を直して」と声がかかれば道具を手に向かう。孫は市中心部の保育園や小学校に通う。取り戻しつつあった安らぎを、今度は9月21日の雨が奪った。

谷内さんは「もう怖くて住めん、というのが本音やね」と力なく笑う。

地震前から、誰にでも住みよい土地ではなかったかもしれない。

戦後の復興期、杉が植林され、林業が生活の糧となった。だが安価な輸入材の影響と都市部への人口流出で、山林は荒廃。太った杉は道へと枝を伸ばし、冬は雪の重みで折れた枝が電線を切り、停電が当たり前になっていた。

谷内さんは、1キロほど離れた幹線道路の近くに集落でまとまって移転したいと考えている。市に災害公営住宅の建設も相談しているが、前向きな回答は得られていないという。

市の担当者は「市内全ての地区の要望に応えるのは現実的に難しい」と話す。市は復興まちづくり計画の基本構想の中で、被災した集落の「現地再建を支援」とともに、「災害リスクや孤立可能性の高いエリアなどから市街地への移転を支援」としている。担当者は「市街地は便利だけでなく、次の災害があった際に電気や水道の復旧も早くなる」と話す。

2025 年度 人間環境学部 自己推薦入学試験
2025 年度 人間環境学部 国際バカロレア利用自己推薦入学試験

小論文 問題

(前ページ続き)

ただ、谷内さんは「わしらみたいな田舎もんは、人が多いところはどうしても心が疲れるんよ」という。集落の住民の多くは市外に出て、子どもの家やみなし仮設住宅で暮らす。「みんなバラバラになってしまった」(椎木慎太郎)

出典：2024 年 11 月 1 日 朝日新聞夕刊 9 ページ

=====

【文章 2】

『バケツ差し出す小さな手 飢えるガザ、現地通信員が見た』

イスラエル軍の激しい攻撃で3万人近くが亡くなり、食料事情も極限の状況にあるパレスチナ自治区ガザ。約140万人の避難民が集まる南部ラファの様子を、現地在住のムハンマド・マンスール朝日新聞通信員が報告する。

昨年10月に戦闘が始まって以来、私たちの命をおびやかしているのはイスラエル軍による空爆や砲撃だけではない。戦火から必死で逃げのび、テントの陰に身を潜めても、貧困と飢えは静かに、確実に、人々をむしばんでいる。

市場ではあらゆるものが売り切れた。時に、食料が並ぶことがあっても、避難生活を送るほとんどの市民には、到底支払えないような金額に高騰している。

確かに食料がまったくないわけではない。

でも、ほとんどの人たちにとって事実上ないのだ。

ラファを歩くと、目に飛び込んでくるのは、多くの人が生活するためひしめくように並ぶテントと、その間にできる食料を求める長蛇の列だ。

生活は国連やボランティア団体などによる支援物資に頼るほかないが、たとえ食事にありつけても、一人分の量には満たない。

私たちはほとんどの場合、大家族で生活している。他の家族のためにと、できるだけ大きなバケツを手に食料を探すのが、ラファの人々の日常だ。

ムハンマド・エリアンさん(59)は「もう、エネルギーが残っていない。かろうじて生きのびてはいるが、このような暮らしは『人生を生きている』とは言えないと思う」と、疲れ切った表情で話す。

そんななか、家族の「食料探し」に活躍しているのが子どもたちだ。大人以上に連携し、地域のどこで食料を得られるのかを情報交換しているようだ。

カメラを向けると笑顔を見せ、時に友達とはしゃいでみせるが、私が見ている限り、子どもたちは、どんどんやせていっている。

マフムード・アルカファルナさん(14)はガザ北部から逃げてきた。

「食べ物を探しているんだ。家族のために」

すすけたボールを手に、やせ細った体でそう話した。この現状を「悪夢としか言いようがない。とにかくこんな日常は早く終わってほしい。そしてとにかく僕たちの家に戻りたい。まだ壊されないで残っているかは、わからないけど」と話した。

小論文 問題

(前ページ続き)

■感染症にも

子どもたちは感染症にも苦しんでいる。国連安全保障理事会の27日の会合では、子どもたちの窮状について、アルジェリアのベンジャマ国連大使が、「5歳未満の子どもの少なくとも約90%が、一つ以上の感染症にかかっている」と述べた。(ラファームハンマド・マンスール、エルサレム＝高久潤)

出典：2024年2月29日 朝日新聞朝刊 9ページ

=====

問1 【文章2】に出てくるガザの人々のように、同じ国に住んではない「遠くの見知らぬ人々」を支援する必要があるのはなぜか。その根拠とあわせて述べなさい。

問2 二つの文章に出てくる人々の両方を同時に効果的に支援する資源（リソース：具体的には人員や資金など）が十分でない場合、日本（人）としてはいずれの支援を優先すべきか。その根拠とあわせて述べなさい。